



Title	閉ざされた耳／港：『ペリクリーズ』における海賊問題
Author(s)	中村, 未樹
Citation	大阪大学英米研究. 2020, 44, p. 73-88
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99445">https://hdl.handle.net/11094/99445</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 閉ざされた耳／港

## —『ペリクリーズ』における海賊問題—\*

中村 未樹

はじめに

『ペリクリーズ』(*Pericles*; 1607~1608年頃制作・初演<sup>1</sup>)において、タイヤの君主ペリクリーズ(Pericles)はアンタイオカス(Antiochus)による暗殺の危機、憂鬱症、難破、そして家族との別れという苦境を経験するが、最後には死んだと思っていた娘と妻に再会し幸福を得る。本作品は主人公が幾多の試練を乗り越えていく物語なのである。劇の説明役を務めるガワー(Gower)は観客に次のように伝えている—“Be quiet then, as men should be, / I'll show you those in troubles reign, / Losing a mite, a mountain gain.”(2.0.6-8)<sup>2</sup>。

だが、『ペリクリーズ』は別の危機について語った劇として読むことができる。それは17世紀初頭における海賊をめぐる問題である。ジェームズ1世は即位以降、海賊の取り締まりを行ったが事態は改善されなかった。『ペリクリーズ』では実際に海賊が登場している。4幕1場、ターサスの海岸でペリクリーズの娘マリーナ(Marina)がリーオナイン(Leonine)に殺されそうになった時、突如海賊が現れてマリーナを捕まえ、連れ去っていく。このような海賊の脅威は当時の社会において現実的なものだった<sup>3</sup>。

『ペリクリーズ』と海賊問題の繋がりについてはChristopher N. Warrenが言及している。Warrenは海賊たちがこの劇では好意的に描かれており、海賊を排除しようという動きに対する批判が行われていると考えている(83)。Warrenの議論は海賊が登場する場面に限定されている。本論は、『ペ

リクリーズ』において海賊問題の影響がより広い範囲で見られることを示しつつ、本作品が海賊問題に関する解決策を提示していることを明らかにしていく。

第 1 節では 17 世紀初頭における海賊取締法について概説する。第 2 節と第 3 節では海賊問題と『ペリクリーズ』の関連性について港・海辺という境界に対する意識、そして船乗り・商人・軍人・海賊の境界という観点からそれぞれ確認していく。第 4 節ではペリクリーズとマリーナの再会の場面を再考し、海賊問題に関する鍵がそこに窺えることを 1608 年の海賊取締政策との関連において論じていく。

### 1. 17 世紀初頭における海賊取締法

エリザベス朝においては国家によって認められた海賊行為、つまり私掠(privateering)と違法である海賊行為について大まかな区別をしようとしていたが、実際には両者の区別は曖昧であった。ジェームズ朝において海賊は全て違法となった<sup>4</sup>。ジェームズ 1 世が即位した 1603 年から 1609 年にかけて、海賊取締の布告が相次いで出されている。

- ①1603 年 6 月 23 日 A Proclamation concerning Warlike ships at Sea
- ②1603 年 9 月 30 日 A Proclamation to represse all Piracies and Depredations upon the Sea
- ③1604 年 11 月 12 日 A Proclamation for the search and apprehension of certaine Pirats
- ④1605 年 3 月 1 日 A Proclamation for revocation of Mariners from forreine Services
- ⑤1606 年 6 月 13 日 A Proclamation for the search and apprehension of certaine Pirates
- ⑥1609 年 1 月 8 日 A Proclamation against Pirats

ここでは①、②、④の布告について概要を述べておきたい。まず、①は先王エリザベス1世によって私掠を許可された者たちが政策の変更を知らずに掠奪行為を続けていることが語られている。そして、正当な許可状を持たずにイングランドの友好国に対して掠奪行為を4月24日以降に行った者とその共犯者、協力者は海賊とみなして処刑すると述べている（Larkin and Hughes 30-32）。

②は海上での掠奪がいまだ続けられていることに触れ、他国との友好関係の維持のため、また「司法を守る」（preserve Justice）という観点からより徹底した海賊取締の対策を探ると述べている。その主な内容は次のようになる——1. イングランドの軍人は海賊行為を行う船に乗ってはいけない。これに背いた場合、死刑及び財産没収となる。2. 他国の船を襲い保有した者も上と同じ処罰を受ける。3. 副海軍卿（viceadmiral）はどのような軍人が港に出入りしているか海事裁判所（Court of Admiralty）に四半期ごとに報告する。4. イングランド国民は海賊と商品売買や契約、食事の提供を行ってはいけない。5. 各港の副海軍卿、税関、港の役人は港を出る船を前もって検査し、軍事的装備を持っている場合は捕捉すること（Larkin and Hughes 53-56）。こうしてジェームズ1世の新政府は港での取り締まりを強化することになった。

④はイングランドの水夫、また海運業関係者たちが戦時に掠奪活動によって利益を得ることを覚え、今や商業目的の航海における仕事という誠実な（“honest”）職業を離れて、軍人という肩書の下で他国の君主に奉公し、海上での非合法の掠奪活動によってイングランド、及び他国の「誠実な」商業活動を妨害しているという事を伝えている<sup>5</sup>。それらの者たちに対して、他国の君主に奉公する、また私掠免許状や報復許可状を貰うことを止めて帰国し、合法的な商業活動を行う、もしくは船乗りになるようこの布告は命じている。イングランド人が他国の君主に仕えるという、服従をめぐる問題がここには窺える。また、イングランドの港の出口近くで留まり、他国の船を待ち構えて拿捕しようとして船がいることを述べ、そのような行為を取り締ま

るよう通達している (Larkin and Hughes 108-11)。

以上の数年間における取締は十分な効果はなかったようであり、1608 年の時点で少なくとも 500 の海賊船が海にたむろしていると見積もられていた (Senior 11)。また、政策の変更によって私掠というそれまでの「仕事」を失った者たちが港町に溢れ、治安が悪化していくという問題も存在していた。1603 年 7 月 26 日、プリマスの市長が枢密院に町の状況を報告している。

[S]ince our late Queen's death, there do daily resort heither such a great number of sailors, mariners and other masterless men, that heretofore have been at sea in men of war, and being now restrained from that course do still remain here and pester our town which is already overcharged with many poor people. And some of them do daily commit such intolerable outrages as they steal and take away boats in the night out of the harbor and rob both English and French. . . . (qtd. in Senior 10)

元々私掠船に乗っていた水夫や船乗り、浮浪者が海賊行為を行っていたのである。

一連の海賊取締法が十分に機能しなかった理由として、admiralty (海軍本部) 内部の不正、及び法の不整備が挙げられている。まず、現場で海賊を取り締まる立場にある役人自身が海賊と関係があった。例えば、デヴォン州の副海軍卿である Richard Hawkins (John Hawkins の息子) は海賊から略奪品を取り上げ、あるいは賄賂を貰った上で彼らを解放していた (Senior 130-32)<sup>6</sup>。実際、④の布告は、海賊から物品を受領することを禁じているにも関わらず、海賊が港に持ち込んだ物を受け取っている役人たちがいまだにいることを述べている (Larkin and Hughes 108-11)。そして組織のトップに位置している海軍卿の Charles Howard も不正を行っていた<sup>7</sup>。

海賊行為に対する合法・違法の判定は権力者たちによって左右されることが多い。また、海賊は有事において海上戦力にもなりえたため、政府は

その処罰を実際にはためらっていた (Senior 18)。さらに、海賊の法的取り扱いにおいて、各裁判所の管轄の調整不足があった<sup>8</sup>。海賊たち自身も法的措置から逃れるために様々な手段・言い訳を考えていた。私掠免許状の中には怪しいものもあった (Andrews 13, Benton 56)。以上の点を踏まえた場合、海賊をめぐっては合法・違法の境界は極めて曖昧であったと言うことができる。海賊は司法 (justice) の不確かさと不具合を露わにする存在であったのだ<sup>9</sup>。

## 2. 港・海辺という境界

ジェームズ1世の和平政策によってそれまで敵国であったスペインによる侵略の脅威はなくなったが、一方でイングランドの港は海賊によって脅かされていた。Robert T. Tally Jr の “a boundary or border might become a threshold, but only when it is transgressed” (xi) という見解を参考にするならば、海賊たちによる侵犯行為によってイングランドの港は緊張を含んだ “threshold” へと変容していたのである<sup>10</sup>。

『ペリクリーズ』において港に停留する船についての確認が繰り返し行われていることはこの緊張状態を彷彿させる。アンタイオケからタイヤに逃げ帰ったペリクリーズは、アンタイオカスの侵攻を危惧して、港にどのような船が入っているか確認してくるよう命じている—— “All leave us else, but let your cares o'erlook / What shipping and what lading's in our haven, / And then return to us.” (1.2.47-99)。2幕2場ではターサスの市民が沖にいる船（食料を積んでやってきたペリクリーズの船）について報告する—— “We have descried upon our neighbouring shore / A portly sail of ships make hitherward” (2.2.59-60)。5幕1場ではミティリーニの支配者ライシマカス (Lysimachus) がペリクリーズの船がどこから来たものか尋ねに来ている (5.1.14-16)。

本作品において繰り返される海辺での身元確認も、港・海辺における同時代の警戒心の表れとして捉えることができる。ターサスからの帰途に難破

し、ペンタポリスの海岸に漂着したペリクリーズは漁師に助けを乞う。漁師たちはペリクリーズに物乞いはできないのか<sup>11</sup>、また魚を捕まえることができるかを尋ねた後で、“for here's nothing to be got nowadays unless thou canst fish for't” (2.1.68) と言う。Roger Warren 編集の Oxford 版テキストは “fish for't” について “get by corrupt means” という注釈をつけている (Scene 5, 109-10)。この台詞はペリクリーズに対する冗談であるが、先に引用したプリマスの市長の言葉も踏まえると、海辺の町における犯罪の存在を示唆しているとも考えられる。そして、海辺に現れた余所者のペリクリーズを不審人物として捉えようとする視線がそこには認められる<sup>12</sup>。

3 幕 2 場では、ペリクリーズの妻タイーサ (Thaisa) が納められた棺がエフェサスの海岸に漂着する。医者のセリモン (Cerimon) とその弟子たちによって彼女の身元確認が行われるが、その時彼らは棺の中の “passport” を発見する (3.2.65)。エリザベス朝のイングランドにおいて、パスポートは所有者の身分とその人物の安全な通行を保証するものになっていた。例えば、1574 年 11 月、ノリッジに住んでいた外国人 (“straingers”) が Lynne に引っ越ししたいという請願を出したが、女王はそれを認めずノリッジに留まるよう伝えている。その際、もしイングランド国外に出る場合は “pasport” を与えると述べている (Dasent 311)。タイーサの棺を開ける場面は John Gower の *Confessio Amantis* では “the letter” (1.1189)、Lawrence Twine の *The Patterns of Painful Adventures* では “a bill” (447)、“a scroll of paper” (448)、George Wilkins の *The Painful Adventures of Pericles Prince of Tyre* では “this Letter” (60) という語が使用されている。『ペリクリーズ』においてのみ使われている “pasport” という語は、“port” という threshold とそこでの身元確認に対する意識を反映したものではないだろうか<sup>13</sup>。

### 3. 船乗り・商人・軍人・海賊の境界

前節で触れたように、17 世紀初頭のイングランドの海賊たちは元々船乗

りや商人、あるいは軍人である場合が多かった。一例を挙げれば、イングランド人 John Muckill はロンドンの商人であったが、オランダから私掠免許状を貰い、彼自身が船長を務める船（乗組員はイングランド人 34 名と数名のオランダ人）によって掠奪を行っている。これは布告④が問題視していた他国の領主に仕えるという行為に該当するが、実際は Muckill は私的な利益を追求していた。1605 年 1 月 20 日にはオランダ船ジョナスを襲い、その船荷をコーンウォール、シシリーア島、さらにはモロッコで売りさばいている (Senior 125-27)。この時代において船乗り・商人・軍人・海賊の境界は曖昧になることがあり、これらの間での転身が自然に行われていたのである<sup>14</sup>。

興味深いことに、船乗り、商人、そして軍人の性質を劇で垣間見せているのが本作品の主人公ペリクリーズなのである。ヘリケイナス (Helicanus) はタイヤを離れた主君ペリクリーズが「船乗りの苦勞」をすると話している—— “So puts himself unto the shipman’s toil, / With whom each minute threatens life or death.” (1.3.23-24)。これはペリクリーズの船旅に言及したものであるが、ペリクリーズと船乗りが結び付けられている点は重要である。 “Pericles certainly seems more at home in the water” (150) と Stuart Elden は指摘している<sup>15</sup>。

ペリクリーズの商人的側面は取引の行為に窺える。飢餓に苦しむターサスに食料を持ち込んだ際、彼はその代償として港での停泊を求め (1.4.97-98)、3 幕 3 場では娘のマリーナの養育を依頼している (12-17)。この二番目の行動が見返りを暗黙の裡に求めたものであることは、クリーオンがすかさず自分たちが受けた恩義ということを言い出している (18-21) ことからも明らかである。なお、『ゲスター・ロマノールム』では飢餓に苦しむターサスに食料を施した際、アポロニウスは商人と思われるのを嫌って代金を結局は受け取らず、返している (伊藤 598)。Laurence Twine の翻訳ではこの箇所は “But Apollonius, doubting lest by this deede, he should seeme to put off the dignitie of a prince, and put on the countenance of a merchant rather than a giver” (433) と書かれている。本人によって否定されてはいるが、アポロニウスと

商人との類似性を私たちにはかえって意識することになる<sup>16</sup>。

ペリクリーズの軍人としての才能はペンタポリスにおいて発揮されている。ペンタポリスの海岸に流れ着いた父親の形見の鎧を見たペリクリーズは、“I'll show the virtue I have borne in arms” (2.1.141) と自らの武術の技能について述べる。その言葉を証明するかのように、彼は御前試合で優勝して“wreath of victory” (2.3.9) を得る。そして、ペンタポリスの国王サイモニデイーズ (Simonides)、及び対戦相手であった他の騎士たちから敬意を表されている。

これまで見てきた三つの側面はテキストが明示的に示しているものである。だが本作品に潜在的に窺える最後の側面－すなわち海賊－について検討しておかねばならない。ペリクリーズの背後には海賊の影が見え隠れしている。まず劇の冒頭において私たちが目にしたのは、アンタイオカスの出した謎を解くことができずに処刑された求婚者たちの首であった (1.0.39-40, 1.1.35-45)。この晒された体は、ペリクリーズの死の可能性を意味するとともに、同時代の公開処刑の光景を観客の意識に呼び起こすものではなかっただろうか。海賊はロンドンの Wapping のテムズ川の河岸にある Execution Dock で処刑された。絞首刑の後、彼らの体は杭に括られ、川が三度満潮になって頭見えなくするまでそこに置かれた。その後、死体はテムズ川を行き来する船乗りたち (または海賊) の視界に入るよう晒し台で晒された (Senior 121-22, Jowitt, “Scaffold Performances” 153)<sup>17</sup>。第一・四折本 (以下 Q 1; 1609 年出版) のタイトルページにあるように『ペリクリーズ』はグローブ座で上演された。この劇場の傍を流れるテムズ川は、舞台上的の首 (“fearful objects” (1.1.44)) を海賊の死体の光景へと重ね合わせることに一役買ったであろう。ペリクリーズがその旅の初めに見た光景がこのようなものであったことは示唆に富む。

また、先述したようにターサスの港に入ってきた船の知らせを聞いたターサスの国王クリーオン (Cleon) は、それを隣国による侵攻と勘違いする (64-69)。ペリクリーズの船は (白旗をもし揚げていなければ) 海上戦力を

彷彿させる容貌を持っていたのであり、この台詞を聞いてイングランド沿岸を襲う海賊船の姿を思い浮かべることも不可能ではなかつたであろう<sup>18</sup>。

ペリクリーズを海賊と直接的に結びつけることはできない。だが、船乗り・商人・軍人・海賊の区別が曖昧になつてゐた当時のイングランドの状況を念頭に置いた場合、転身可能な対象として海賊の影がペリクリーズに憑りついているように見えるのは不自然なことではない。ペリクリーズの流転の人生は、この潜在的な転身可能性に由來する危うさも含んでゐる。以上の点において、ペリクリーズの名前がラテン語の “periculum” (danger) の言葉遊びになつてゐる (Holland 16) ことは重要である。そして、このような解釈を土台とすることによって、劇のクライマックスにおけるペリクリーズとマリーナの対話を新たに読み解していくことが可能になる。

#### 4. 閉ざされた耳／港

マリーナについてはその存在の分類不可能性が指摘されている。Thomas Roebuck と Laurie Maguire は “She [Marina] does not fit into any of the politices within the play: she is between nations, regions, lands” (34) と述べている。また、Brian Cormack は以下のように論じてゐる。

Marina, born as she is on the ocean, resists legal categorization altogether. . . . To be born on the sea is to belong to no shore. Marina here posits an identity split off from the categories that territorial law requires to make sense of the world. . . . it is Marina who is the play’s most perfect stranger, in the sense that, strictly speaking, the circumstances of her birth make her foreign to place in general. (287-88)

国家的、法的な範疇化を拒むその在り方、土地への非－所属という点においてはマリーナは海賊と類似している。彼女は海賊に捕囚された経験を持つ。

また、マリーナの名前は海というテリトリーを表し、彼女は自分の人生を嵐に例えている (“This world to me is as a lasting storm” (4.1.18))。さらに、売春宿において彼女を初めて見たライシマカスは “she would serve after a long voyage at sea.” (4.5.49-50) と船旅をしてきた人間のように自分を語っている。父親ペリクリーズと同じように、マリーナも海賊を我々の心に呼び起こす触媒になっているのである。

このことを踏まえるならば、この父と娘の対話を海賊問題の文脈において分析していくことはあながち的外れではないだろう。ペリクリーズは妻と娘を失った悲しみのため、誰とも話さなくなっている (5.1.20-25)。ヘリケイナスからこのことを聞いたライシマカスはマリーナを推薦するが、興味深いことに “ports” という語がそこで使われている。

She questionless, with her sweet harmony  
And other choice attractions, would allure  
And make a battery through his deafened ports  
Which now are midway stopped. (5.1.37-40)

“deafened ports” という言葉によって、ペリクリーズの「閉ざされた耳」にマリーナの話と音楽を聞かせることが「閉ざされた港」を砲撃することに譬えられている<sup>19</sup>。途中で塞がれた港のイメージは、海賊船が停泊している当時のイングランドの港の光景を想起させる。ここには、海賊を追い払うというメッセージを読み込むことができるのではないだろうか。

船上での親子二人の会話は、途中からマリーナの身元確認になっていく。マリーナは自分の身の上を語る際、自分の話すことが嘘だと思われることを懸念している (5.1.108-10)。だが、ペリクリーズはマリーナの話を信じると約束する。

Falseness cannot come from thee, for thou look'st

Modest as Justice, and thou seem'st a palace  
For the crowned Truth to dwell in. I will believe thee  
And make my senses credit thy relation  
To points that seem impossible. For thou look'st  
Like one I love indeed. What were thy friends? (5.1.111-16)

Roger Warren が指摘するように、この場面は一連の質問によって構成されている (Warren 54)。“Justice”、“Truth” という語は法的な審問の場を想起させる<sup>20</sup>。これ以降も確認が繰り返され、疑いが抹消されていく—— “What was thy mother's name? tell me but that, / For truth can never be confirm'd enough, / Though doubts did ever sleep.” (5.1.190-92)<sup>21</sup>。マリーナは他人の名を騙るペテン師 (“impostor” (5.1.168)) と思われることを心配しているが、そのような変身・転身を試みる犯罪者であるという疑惑も消散する。

ペリクリーズはマリーナと対話し、質問を行うことによって悲しみという心の敷居を乗り越え、その彼岸にある幸福へとたどり着くことになった。この親子の感動的な再会というファンタジーの背後には、審問を行い、「司法」を通じて「真理」を確立するという法の理想・彼岸が幻視されている。そのためには、まずは〈耳・港を開ける〉ことが必要なのである<sup>22</sup>。

1608 年 5 月 20 日、『ペリクリーズ』が書籍商組合に登録された。その翌日の 5 月 21 日、枢密院はノッティンガム伯爵<sup>23</sup>に対して、イングランドの沿岸諸州から 10 人の市民を海賊取締委員に任命するよう命じ、本格的な海賊問題の状況調査を行わせた。結果として、汚職を行っていた副海軍卿たちの審問が始まらていく。Richard Hawkins は 1609 年 5 月に Star Chamber で裁判にかけられ、1610 年に vice admiral の職を解任されることになった (Earle 58, Senior 134-35, Kenny 301-05)。

『ペリクリーズ』の Q1 では、ペリクリーズ暗殺のためにタイアを訪れたタリアード (Thaliard) の台詞が “but since hee's gone, the Kings seas must please: hee scap'te the Land to perish at the Sea” (1.3.28-29) となっている。

“the Kings seas” という言葉を国王ジェームズ 1 世と関連づけて読むならば、海賊を排除した「王の海」の確立のためには法的審判に基づいた “Justice” の確立が必要であったのである。

果たして、上記の政府の試みは多少の成果は収めたが、以降においても海賊はやはり活動を続けていく<sup>24</sup>。『ペリクリーズ』の海賊たち（彼らには名前がなかった）は、4 幕 2 場を最後に舞台に現れることはなく、彼らがその後どうなったかは明らかにされてはいない。

\*本稿は第 58 回シェイクスピア学会（2019 年 10 月 7 日、於 鹿児島国際大学）のセミナー「シェイクスピアと法」における口頭発表（「『ペリクリーズ』における法と境界」）を大幅に加筆修正したものである。

## 注

- 1 Gossett 60-61 を参照。
- 2 『ペリクリーズ』からの引用は Susanne Gossett 編集のアーデン版テキストによる。
- 3 海賊の活動した地域については Senior, Chapter 2 及び Chapter 5 を参照。
- 4 Jowitt “Rogue Traders” 62、Senior 8 を参照。私掠については他に Andrews、Earle、Harding、Thomson 22-26、及び櫻井（第 1 章）を参照。
- 5 海の仕事に携わる人間の数は 1582 年は約 16000 人で、その後の 20 年間に 3 倍となっていた（Senior 9）。薩摩第 1 章、第 2 章も参照。
- 6 薩摩 pp.69-70 も参照。
- 7 Charles Howard に関しては Kenny を参照。
- 8 共犯者は、主犯である海賊が有罪と宣告されるまでは裁判にかけられなかった。その際、主犯である海賊を裁判にかけるのはコモン・ロー裁判所ではなく海事裁判所になるのだが、海賊が陸上で犯した犯罪（略奪品の販売）に関しては海事裁判所の管轄外になるというずれが存在していた（Senior 125）。
- 9 Claire Jowitt は “the Renaissance ‘pirate’ was a more liminal figure than is often acknowledged. . . . pirates existed in a border state between law and lawlessness” (“Rogue Traders” 54）と指摘する。
- 10 George Wilkins の *The Painful Adventures of Pericles Prince of Tyre* の序文にも「入り口」をめぐる意識が見受けられる。Wilkins は門を突破することの難しさにつ

いて語る—— “I see Sir, that a good coate with rich trappings gets a gay Asse entraunce in at a great Gate (and within a may stalke freely) when a ragged philosopher with more witte shall be shutte foorth of doors: notwithstanding this I know Sir, that Vertue wants no bases to vpholde her, but her owne kinne” (Wilkins 1)。

- 11 当時のイングランドには海難を装う詐欺師、いわゆる whipjack がいたことも付け加えておく。whipjack は難破もしくは海賊に襲われたということを記した偽の免状を持っていた (Salgado 125)。An acte for punishment of rogues, vagabondes and sturdy beggars (1597年) は “all Seafaring-men pretending losses of their Shippes or Goodes on the Sea going about the Country begging” (Tawney and Power 355) を処罰すべき浮浪者の例として挙げていたが、証明書 (“Testymonial”) を持った者の物乞いを認めるよう 1597 年の教貧法は命じている (Tawney and Power 353)。だが、免状を持っている者の多くは偽物であると一般的には思われていたのであり (Bier 109-11)、本物と偽物の区別は曖昧であった。
- 12 ペリクリーズの漁師たちへの呼びかけ “honest fisherman” (2.1.51) はこの点において重要である。彼らは海賊に転身した者たちとは違って「誠実な」仕事に従事している。ただし、漁師の返答 (“Honest! Good fellow, what's that?” (2.1.52)) は実際にはそうとも言い切れない可能性も示している。
- 13 劇における liminality の問題については例えば Cormack, Relihan を参照。なお、ペリクリーズの家族が皆、外国人としての立場に置かれていることに注目したい。ペリクリーズはペンタポリスでは度々 “stranger” と呼ばれている (2.2.41, 2.2.50, 2.3.65, 2.5.15)。マリーナは “Where I am but a stranger” (5.1.105) と述べている。“In the play . . . expatriates, exiles, and persons *en passage* are the ground norms” (72) という Christopher N. Warren の指摘は重要である。
- 14 Harding 38 も参照。
- 15 Gower もアポロニウス (ペリクリーズ) がターサスに向かう際の航海術について記している (“He hath his riighte cours forth holde / By stone and nedell” (548-49))。
- 16 Mullaney 138-39 を参照。
- 17 イングランドの海賊たちは国外 (スペイン、フランス、デンマーク、スコットランド、アイルランド、ポルトガル、イタリア) においても処刑されていた (Senior 145)。例えば、海賊 Tibalt Saxbridge とその手下はユトレヒト、モロッコ、西インド諸島、ニューファウンドランド島、カボヴェルデで活動したが、最後にアイルランドで投降した。彼らは岬において絞首刑となり、見せしめとされた (Senior 64-66)。

- 18 旅に出ているペリクリーズにはタイヤから手紙が二回届けられており (2.0.17-26、3.0.21-33)、最後の場ではサイモニディーズ (Simonedes) が亡くなったという手紙が届いたことをタイーサ (Thaisa) がペリクリーズに報告している (5.3.78-79)。後の二例は国王の死を知らせるものである。王の死による政策変更という点を布告①に関して述べたが、海賊たちは手紙の受領の遅延のため法（私掠免許状の有効性などに関わる）の変更を知らなかったということを自己弁護のために主張することがあった (Harding 32)。
- 19 Q 1 では “deafened port” ではなく “defend part” になっている。
- 20 この場面の法的観点からの議論については田野 18-19 を参照。
- 21 confirmation は法律の用語である。Skinner を参照。5 幕 3 場、タイーサとペリクリーズ、マリーナの再会の場面においても確認 (confirmation) が繰り返されている。タイーサがヘリケイナスの名前を憶えていたことに対して、ペリクリーズは “Still confirmation” (5.3.55) と言う。
- 22 ペリクリーズは「ありえない」(impossible) ことでも信じると誓う。観客がこの再会の場面に情緒的に参加していくためには、同じように親子の会話を聞いてそれを信じるという姿勢が求められる。それはすなわち演劇の法に従うということである。
- 23 後にノーサンプトン伯爵に交代する。
- 24 例えば布告⑥を参照 (Larkin and Hughes 203-06)。

### Works Cited

- Andrews, Kenneth R. *Elizabethan Privateering: English Privateering during the Spanish War, 1585-1603*. Cambridge UP, 1964.
- Bier, A. L. *Masterless Men: the Vagrancy Problem in England 1560-1640*. Methuen, 1985.
- Cormack, Bradin. *A Power to Do Justice: Jurisdiction, English Literature, and the Rise of Common Law*. U of Chicago P, 2008.
- Dasent, John Roche, editor. *Acts of the Privy Council of England*. Vol.8, Her Majesty's Stationery Office, 1890.
- Earle, Peter. *The Pirate Wars*. St. Martin's Press, 2003.
- Elden, Stuart. *Shakespearean Territories*. U of Chicago P, 2018.
- Gossett, Suzanne. Introduction. *Pericles*. By William Shakespeare and George Wilkins, edited by Suzanne Gossett, Thomson Learning, 2004, pp.1-163.
- Gower, John. *Confessio Amantis (Liber VIII)*. *The English Works of John Gower*, edited by G. C. Macaulay, vol.II, Oxford UP, 1901, pp.386-480.

- Harding, Christopher. "‘Hostis Humani Generis’——The Pirate as Outlaw in the Early Modern Law of the Sea." *Pirates? The Politics of Plunder, 1550-1650*, edited by Claire Jowitt, Palgrave Macmillan, 2007, pp.20-38.
- Holland, Peter. 'Coasting in the Mediterranean': the Journeyings of *Pericles*." *Angles on the English-speaking World*, vol.5, 2005, pp.11-29.
- Jowitt, Claire. "Rogue Traders : National Identity, Empire and Piracy 1580-1640." *Borders and Travellers in Early Modern Europe*, edited by Thomas Betteridge, Ashgate, 2007, pp.53-70.
- . "Scaffold Performances : The Politics of Pirate Execution." *Pirates? The Politics of Plunder, 1550-1650*, edited by Claire Jowitt, Palgrave Macmillan, 2007, pp.151-68.
- Kenny, Robert W. *Elizabeth's Admiral : the Political Career of Charles Howard, Earl of Nottingham, 1536-1624*. The Johns Hopkins Press, 1970.
- Larkin, James F. and Paul L. Hughes. *Stuart Royal Proclamations*. Vol.1, Clarendon Press, 1973.
- Mullaney, Steven. *The Place of the Stage : License, Play, and Power in Renaissance England*. U of Chicago P, 1988.
- Relihan, Constance C. "Liminal Geography : *Pericles* and the Politics of Place." *Philological Quarterly*, vol.71, 1992, pp.281-99.
- Roebuck, Thomas and Laurie Maguire. "Pericles and the Language of National Origins." *This England, That Shakespeare : New Angles on Englishness and the Bard*, edited by Willy Maley and Margaret Tudeau-Clayton, Ashgate, 2010, pp.23-48.
- Salgado, Gämmini. *The Elizabethan Underworld*. J. M. Dent & Sons, 1977.
- Senior, C. M. *A Nation of Pirates : English Piracy in Its Heyday*. David & Charles, 1976.
- Shakespeare, William. *Pericles (A Facsimile Series of Shakespeare Quartos)*. Nan'un-do, 1975.
- Shakespeare, William and George Wilkins. *Pericles*. Edited by Suzanne Gossett, Thomson Learning, 2004. (the Arden Shakespeare)
- . *Pericles, Prince of Tyre*. Edited by Roger Warren, Oxford UP, 2003. (the Oxford Shakespeare)
- Skinner, Quentin. *Forensic Shakespeare*. Oxford UP, 2014.
- Tally Jr, Robert T. "Foreword : A ‘Utopia of the In-Between’, or, Limning the Liminal." *Landscapes of Liminality : Between Space and Place*, edited by Dara Downey, Ian Kinane and Elizabeth Parker, Rowman & Littlefield, 2016, pp.ix-xv.
- Tawney, R. H. and Eileen Power, editors. *Tudor Economic Documents*. Vol.2, Longmans

- Green, 1953.
- Twine, Laurence. *The Patterns of Painful Adventures. Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, edited by Geoffrey Bullough, vol.9, Routledge, 1966, pp.423-82.
- Warren, Christopher N. *Literature and the Law of Nations, 1580-1680*. Oxford UP, 2015.
- Warren, Roger. Introduction. *Pericles, Prince of Tyre*, by William Shakespeare and George Wilkins, edited by Roger Warren, Oxford UP, 2003, pp.1-80.
- Wilkins, George. *The Painful Adventures of Pericles Prince of Tyre*. Edited by Kenneth Muir, Liverpool UP, 1967.

日本語文献

- 伊藤正義訳. 『ゲスター・ロマノールム』. 篠崎書林、1988 年.
- 櫻井正一郎. 『女王陛下は海賊だった－私掠で戦ったイギリス』. ミネルヴァ書房、2012 年.
- 薩摩真介. 『〈海賊〉の大英帝国－掠奪と交易の四百年史』講談社、2018 年.
- 団野恵美子. 「陪審員席からみる『ペリクリーズ』」. 『神戸英米論』、第 14 号、2000 年、pp.7-20.